第1章　総　　説

第1節　長崎の概況

長崎の位置と地形

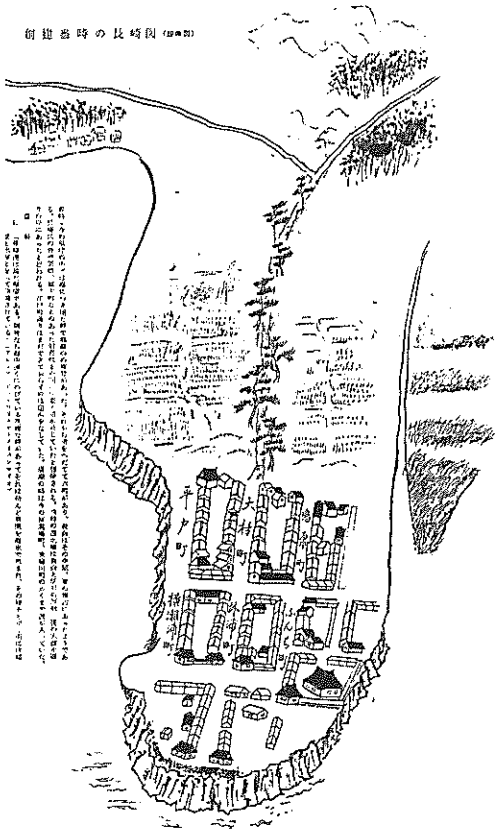
長崎市は、長崎県の行政、経済、文化などすべての中心地である。しかし、その位置は県の南部に片寄り、東経129°43′から129°59′、北緯32°38′から32°52′と、多くの島々を抱える長崎県の地理上の中心としては、決して恵まれた位置にあるとはいえない。

北に西彼杵半島、東は諫早市ほかに接し、千々石湾を望む。また、西は角力灘に面し、南に長崎（野母）半島が伸びる。東西25.0km、南北26.0km、逆三角の形で、面積は241.92㎢（1989年（平成元）10月1日現在）の都市である。

市のほぼ中央、南西方向から北東方向に細長い入江がある。幅0.5～1.2km、長さ4kmのこの湾は天然の良港を形成し、長崎が古くから貿易の町として栄えた最大の理由がここにある。

この長崎港には浦上川、中島川をはじめ数本の川が流れ込んでいるが、これらはすべて短く狭い川であるため、沖積平野を形成することはない。周辺は標高300～400m程度の山々が連なっている。古い火山群で、安山岩や玄武岩におおわれている。

長崎市は、これら山と山、山と海との、そのわずかな間に平地を持つ、急傾斜の起伏に富んだ地形である。江戸時代末期に海軍伝習のため来日したオランダ人海軍士官が、長崎海軍伝習所の建てられている場所について「高い、そうして所々耕された山々に囲まれた、大タライのような所に建てられている（長崎海軍伝習所の日々）」と説明しているが、長崎の地形を述べるのに的を得た表現である。



長崎の都市形成された時の想像図
（市政65年史より）

長崎の気候

長崎市は、海洋の影響と冬の北西季節風の影響を受けやすい表日本式気候の中でも特色のある気候区である。

平均気温は、夏（8月）が27.6℃、冬（2月）が9.2℃、年間を通じても16.6℃と過ごしやすい。降雨量も平年で2,009.4㎜に達しているが、その半分以上は4月から7月に集中している。

しかし、これらはすべて平均値であって、年によっては水不足に悩まされたり、35℃をこす猛暑に悩んだり、雪によって交通機関がマヒしたり、道路が不通になったり、台風の被害を受けることもしばしばである。

第2節　長崎の沿革

長崎の歴史は、開港とともに始まるといっても過言ではない。港と運命を共にしたその歴史は多彩で、数多くの史料・史跡を残している。しかし、逆に開港前となるとはっきりしないことが多い。数少ない史料の中から推測するほかない。

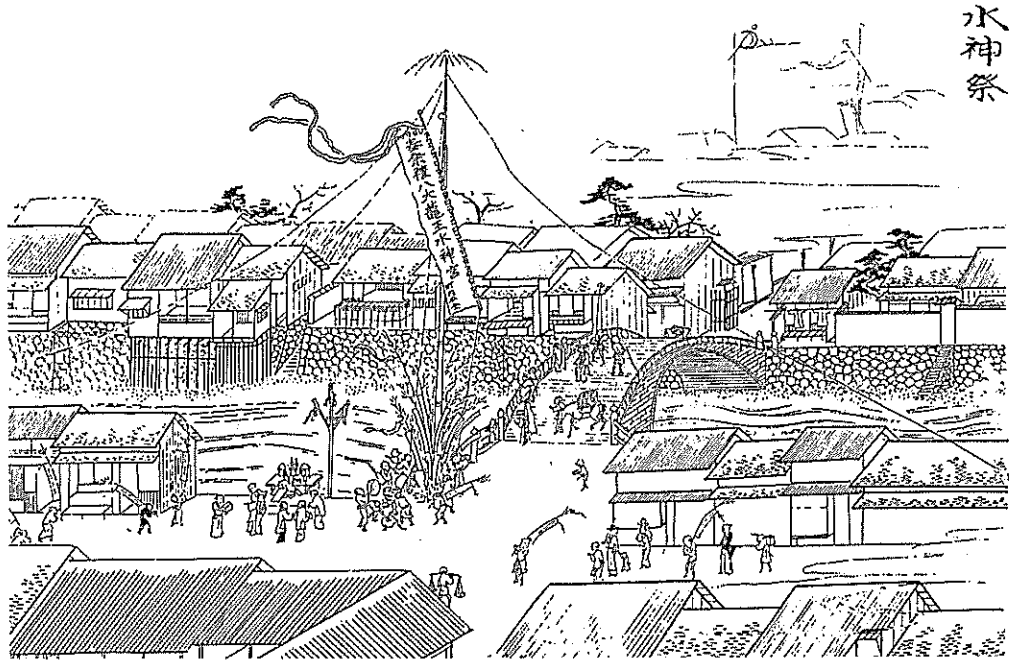
開港前の長崎

長崎に人が住み始めたのは、発見された遺跡などから旧石器時代末期、今から一万年以上前ではないかと思われている。

古墳時代には、部落国家が形成されている。八世紀前半に成立した『肥前国風土記』によると、現在の長崎市の一部にかかると思われる肥前国浮穴郷に浮穴沫媛（女性らしい）という土蜘蛛（地方の豪族）がいて、大和朝廷の命令に従わなかったので景行天皇に退治された、とされている。

平安期には武士が出現してくる。市域にも戸町氏、福田氏などという土着の武士が出現している。現在の市中心地の開発はその頃から始められたと思われる。

古文書によると、十三世紀初頭、鎌倉時代の初期に、彼杵荘戸町浦の近くに永埼浦というところがあり、そこに本拠を置く永埼氏という在地領主がいた、とされている。この永埼氏は、戸町氏一族でおそらく永埼浦の開発領主であって、この地に住み、地名を取って永埼氏と名乗ったのではないかとされている。その後、この永埼浦は、鎌倉時代末期頃から長崎浦の字が当てられるようになり、永埼氏も長崎氏と名乗るようになった。現在の「長



町内総出で井戸を清掃し、水神を祭った江戸時代の風俗
（長崎古今集覧名所図絵）

崎」の地名がここからきているという説がある。

この「長崎」という地名の由来については前に述べた説のほかにも諸説があり、はっきりしていない。長崎市史（長崎市役所発行）では、後堀河天皇の貞応年間（1222～1224）に、長崎小太郎が伊豆の国長崎村（長崎小太郎に関してもほかにいろいろな説がある）から彼杵荘に下向し、深江浦に城砦を構えた(現在の城の古址)、とされている(『長崎史系譜』『長崎略縁起評』『新撰士系録』による)。この長崎小太郎の名を取って、この地を「長崎」と呼ぶようになったとの説がある。また、地形的な特色をとらえて「ナンカミサキ（森崎の岬)」が変じて「長崎」と呼ばれるようになったとの説もある。今後の研究が持たれるところである。しかし、いずれにしても、長崎氏が中世においてこの地と（領主として）深いかかわりがあったことは間違いない。

長崎氏は、現在の桜馬場とその一帯を領地としていた。また、自衛上の必要から大村氏に従い、島原の有馬氏とも親しかった。一方南には深堀氏が、諫早には西郷氏がおり、戦国時代にはしばしば戦いを起こしている。しかし、長崎の地においては長崎氏が優勢であったらしく、その後は大村氏との深い関係を保ちながら隆盛を極めていった。

のちに、大村純忠の娘婿、長崎甚左衛門純景が領主となり、やがて、長崎開港という一大転機を迎えることになる。「キリシタンの歴史」もまた、開港を目前に始まることになるのである。

開港後の長崎

フランシスコ・ザビエルが我が国に布教の種子を蒔いたのは1549年（天文18）のことであるが、その翌年には平戸にポルトガル船が入港している。しかし、ポルトガル人と平戸の仏教徒との争いが絶えず、領主松浦隆信は1558年(永禄元)、宣教師を領内から追放している。そののち、1561年（永禄４）にポルトガル船員と町民との間で殺傷事件が起きているが、この事件の処理に対する隆信の態度を不服としたポルトガル人と、松浦氏との断絶は決定的なものとなった。

1567年長崎で最初に掘られたキリシタン教会の井戸（春徳寺に現存する）（撮影 原賀欣一郎）

1562年（永禄５)、願いに応じて大村純忠は、今の西彼杵郡西海町瀬川の横瀬浦をポルトガル船に開港しているが、ここでも同じようなトラブルが起こり、1565年（永禄８）今の長崎市福田を開港し、この地にポルトガル人を受け入れた。まもなく教会堂も建立されたが、貿易港としては立地に適さなかった。そこで、港としての適地を捜していたポルトガル人は、1570年(元亀元)、天然の良港である長崎を発見し、その地の開港を大村純忠に願い出た。

その頃はすでに、長崎にもキリスト教が伝えられていた。領主の長崎甚左衛門は1563年（永禄６)、大村純忠とともに横瀬浦で洗礼を受けており、キリスト教に対しては極めて好意的であった。このこともあり、大村純忠は開港の願いを許し、準備に取り掛かった。家臣朝永対馬を長崎に派遣し開港の条件を協議させ、1571年（元亀２）３月には町建てに着手、８月にはポルトガル船が入港し、貿易が

始まることになる。これが長崎開港の起源とされている。

長崎開港に伴う町づくりを始めた場所は、現在の県庁のある付近で、松などが生い茂った岬の突端、約8,000坪程度の丘陵地であった。ここに、島原町・大村町・横瀬浦町・文知町・外海町・平戸町の6町を造った。そののち市域は、ここを中心に人口の増加とともに次第に6町の外へと広がっていき、埋め立てによって海のほうにも拡大され、町は発展していった。開港から8年たった1579年（天正7）には400戸を超える住居があったという（宣教師の書簡による）。

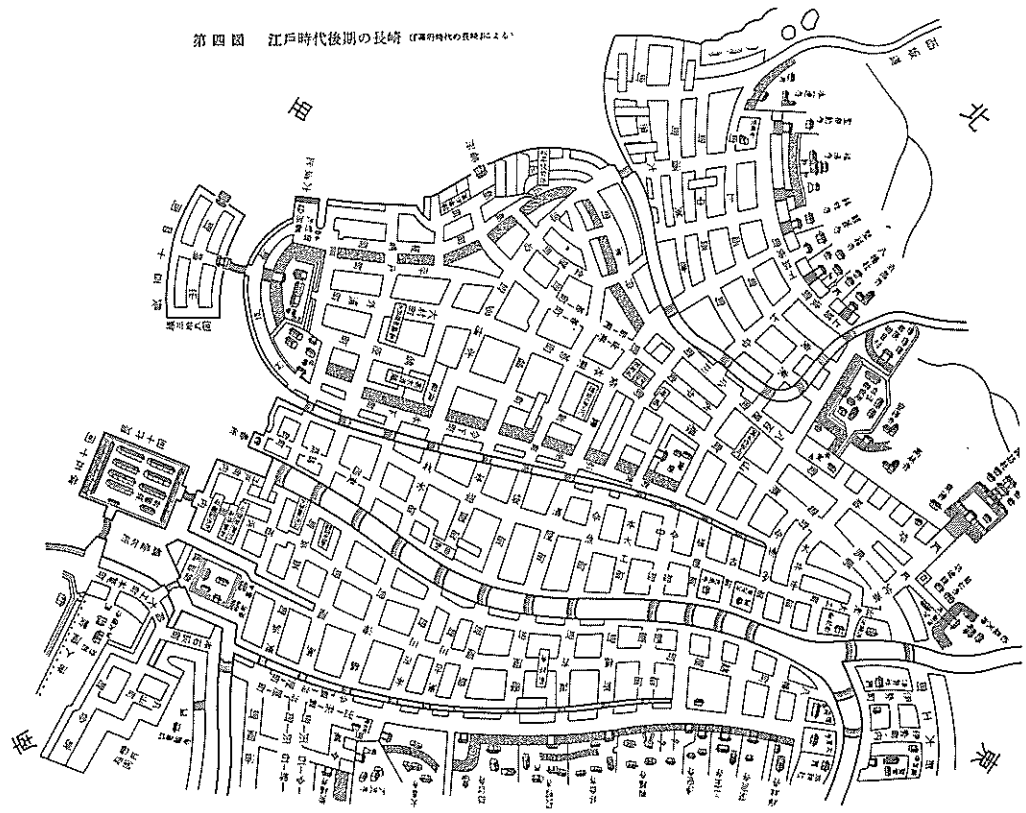
この頃も、大村氏と近隣諸氏との争いは続いていた。開港後も、佐賀の竜造寺氏、武雄の後藤氏、諫早の西郷氏、深堀の深堀氏などとの争いが絶えず、長崎もしばしば戦火を浴びていた。このようなことから、1580年（天正8）、自衛のため長崎は茂木とともにイエズス会に寄進され、浦上もまた、1584年（天正12）、イエズス会に寄進された。しかし、このことを知った豊臣秀吉は大いに怒り、1587年（天正15）これを没収して公領とした。このののち明治維新まで、長崎は幕府の直轄領（天領）としての道を歩むことになるのである。

開港以降、港にはポルトガル船や唐船が頻繁に来港し、長崎は南蛮貿易時代を迎えた。

町には外国人が行き交い、自由で活力に満ちた新興都市として発展していった。市域もまた、貿易の進展によってしだいに拡大され開港から38年目の1608年（慶長13）には総町80町を数えた。ここに至って町建ては一段落するが、その後も貿易が盛んになり、それにつれてそれぞれの町がしだいに大きくなっていった。

ここに問題が生じた。長崎は平地に恵まれ

江戸時代後期の長崎地図



ていない。町が活況を呈し人口が増加すると必然的に平地の不足が生じてきた。また、港湾の整備も必要となった。そこで、港の浚渫と低地の埋め立てが盛んに行われるようになり、この埋立地の上に町は広がっていったのである。

江戸時代になり、幕府の禁教政策によって華やかだった南蛮貿易時代も終わりを告げた。

1633年（寛永10）に開始された鎖国政策は1641年（寛永18）オランダと中国に限り貿易を認め、築造間もない出島に平戸からオランダ人を移り住まわせたことでその体制が確立された。それからの長崎は、我が国唯一の貿易港として発展を続けることになった。

元禄の頃には戸数1万1,257戸、人口は6万4,523人を数え、町は活気を見せていた。1715年(正徳5)、新井白石の正徳新令(長崎新令)によって貿易が不振になると一時的に人口は減少し町は衰退したが、その後、1859年（安政6)、安政条約によって長崎が横浜・函館とともに開港場になると、新しい町の歴史をきざむことになった。

このように、長崎は貿易と深い関係を持ちながら発展してきた。町の歴史も拡大も、港町長崎の誕生や拡充と密接な関係を持っているといっても過言ではない。

安政の開国以降、外国の貿易商社や国内の商人たちが次々とやって来た。これらを受け入れるため、海岸は大きく埋め立てられ、背後の丘陵地も開発された。それらには外国人居留地が造られ、公館や商社、ホテルや住宅、教会などが建ち並んだ。

風雲急を告げる幕末。やがて時代は明治へと変わり、長崎は近代都市へと成長していく。

1889年（明治22）に市制が施行され、県下最初の都市として誕生した長崎市は、その後も世界中が激動の時代を駆け抜ける中、数次の戦争を体験し、また、国際貿易港から造船と水産の街へと姿を変えながら、国の近代化とともに発展を続けてきた。

これからの長崎

1989年（平成元）4月、市制施行100周年を迎えた長崎市は、市の将来進むべき方向を長期的な展望と広い視野に立って策定された「長崎市基本構想」に沿って、都市づくりの様々な施策が具体化されつつある。21世紀に向かって「ゆたかで新しい長崎」が創られて行くのである。

第3節　水の沿革

前節に述べたような長崎の歩みは、この地における水道の誕生と発展に、大きな影響を与えている。

近代水道創設前の水

長崎が都市として発展を始めるのは開港後のことである。それ以前は深い入り江に突き出した岬の、樹木の生い茂るところに僅かばかりの畑地がある閑散とした地域で、人々は小川や湧水のほとりに居住していたと思われる。ここに突如として国際貿易港が出現したのである。

開港後、町が形成され、多くの人々が移り住むようになった。生活用水は当然、確保されていたであろうし、平地の乏しい地域であったので、この頃からすでに水の問題は起きていたものと思われるが、このことを記した記録は見当たらない。

1991年(平成3)、岬の突端に近い場所にある町年寄高島家跡の発掘調査が行われ、大きな井戸の遺跡が発見された。また、南蛮貿易時代の遺跡に古い井戸の存在が確認されているが、このことなどから類推すれば、この頃ここでは井戸水が生活を支えていたと思われる。

時代が下がるにつれ、国際貿易港としての

形態を整えていった長崎の町には、京都、堺などからの商人やキリシタンの移住者が年毎に増え、人口は急増していった。鎖国政策により海外貿易の独占港となった長崎は、人口も5万人を超え、江戸、京都、大坂につぐ国内で4番目の大都市に発展した。これにともない、さらに海岸や低地の埋め立てが行われ市街地が造成されていった。

これら市街地で使われる水がどのように開発され確保されていったか、興味ある問題であるが、今日までこの面の研究は進められていない。しかし、長崎の地形的な特徴や町建ての特殊性から見て、開港以降、常に水不足に悩まされ続けたことは十分推測される。このことが後に「倉田水樋」を生み、近代水道の創設を促し、その後も次々と上水道拡張事業を行う理由となったことはいうまでもない。

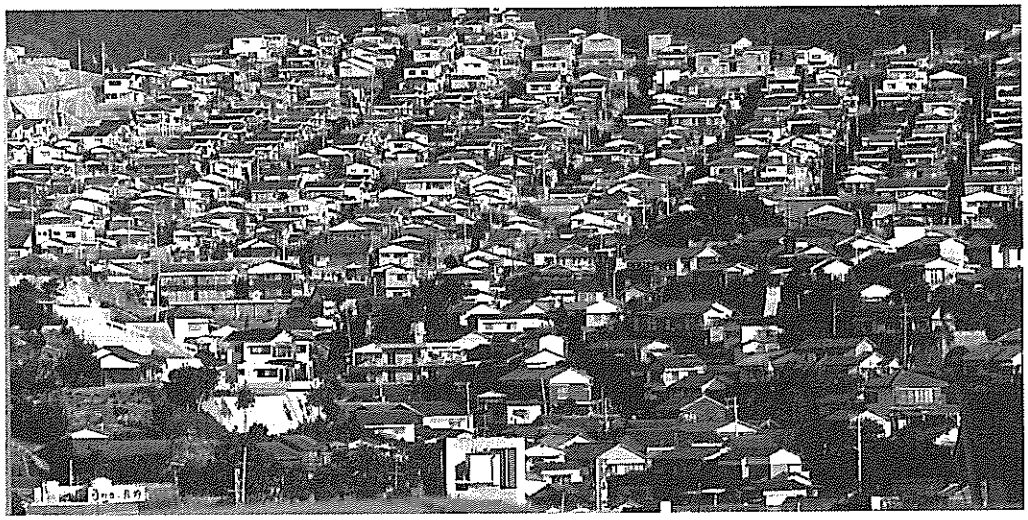
この頃から水に関する若干の記録が残されている。記録をみると、この頃はもっぱら周辺丘陵部の湧水や井戸水を飲料水や生活用水に利用していたらしい。埋立地では井戸を掘っても良質の水は出なかったであろうから、これらを利用するほかはなかったのであろう。また、「水売り」が町々を回り、水を売っていたとの記録もある。

さらに町が大きくなると、飲料水や生活用水のほかに消防用水など都市用水の確保が必要となる。1673年(延宝元)、一人の町民の発意によりその私財を投じて「倉田水樋」が創設された。この水樋は、1891年（明治24）に近代水道が創設されるまでの218年もの間、人々の暮らしを支えることになるが、一民間人の手による創設というこの水樋の事例は、全国的にみても非常にまれであった。

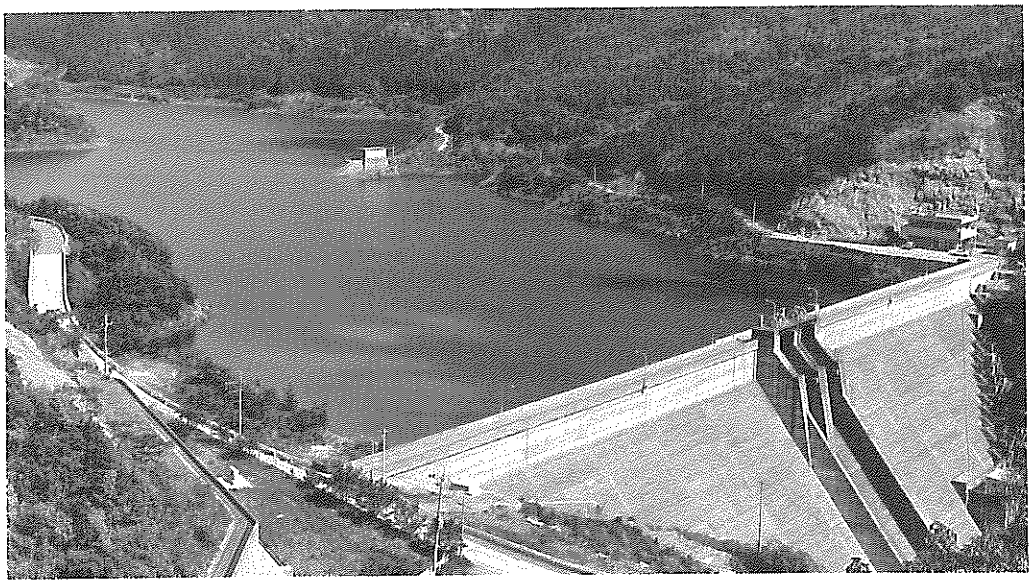
近代水道創設後の水

明治を迎え海外とも交流が一層盛んになると、反面、伝染病も流行するようになった。倉田水樋の老朽化も進み、また、港湾都市長崎の発展のためには衛生環境の改善が緊急課題であるとの見地から、下水溝の改修とともに近代的な上水道施設の設置についての検討が進められた。水道設置には町民の反対など多くの問題があったが、これを克服し、1891年（明治24)、本河内（高部）貯水池を水源とする近代水道が創設された。

その後も、人口増加や都市化現象による住宅地域の拡大に伴う水需要への対応など、多



次々に高台に伸びる住宅地への給水に苦労（撮影 原賀欣一郎）



遠隔の地に水源を求めた神浦ダム

くの難問に直面し、その都度さまざまな悪条件を克服しながら、また、原爆被爆や大水害などの惨禍に見舞われながら、第1回拡張事業から現在施行中の第7回拡張事業まで、水源開発と施設拡充の歴史を歩み、1991年（平成3）に水道創設100周年を迎えた。

将来にむけての水

長崎市は、前節で述べたように地形、地質、気候などの関係から、水については宿命的に「負」の立場にある。「人」のあとに「水」を求める歴史が近代水道創設後も一世紀近く続いている。繰り返し行われてきた上水道拡張事業も水不足の抜本的な解消には至らず、第6回拡張事業の達成においてようやく当面の供給体制が確保されるに至った。

しかし、今後の生活水準の向上や都市活動用水の増加に伴う水需要の増加に対し、対応できる供給体制の確立は不可欠である。そのような中、1985年(昭和60)、長崎県広域水道計画基本構想が県で策定された。これに基づき、将来増加が予測される水需要に対処するため、水源開発を含めた計画的な水の安定供給を図ることを目的に、近接する自治体による協議体が結成され、現在、その具体化が進められている。

今後は、西暦2000年を目指して提起されている「長崎市基本構想」に沿って、「ゆたかな新しい長崎」を創出するために都市整備の基盤としての水道施設の整備拡充を図ることが重要である。市民一人ひとりが心の豊かさを実感できる社会を実現するため「安全で快適な環境を整える」ことを目標に「いつでも、どこでも、安全でおいしい水」を供給できるよう長崎県南部広域水道への参画をはじめとする諸施策に取り組まなければならない。

長崎水道百年の歴史は、次の時代へ飛躍するための土台として位置づけ、これを引き継ぐ人たちの英知と一層の研鑽が期待されるものである。